

幼児の運動能力の調査

安藤 寿美江

広い意味の健康教育或は健康指導には当然体育もはいるべきであると思われるのであるが、従来の習慣上一度区別されているようである。そしていわゆる健康指導、つまり消極的な衛生習慣には相当な関心もたれ、手を洗うこと、歯を磨くこと、或は肝油をのむことなどは、多くの園に実施され、その成果は大分あげられているようである。ところが、積極的な体育については、幼児は養護の時代であるから体力増進までは余り考えないでもよいであろうというので、漠然とあそびの中でその効果を期待しているというのが、一般の状態である。

しかし、これによいであろうか。五才前後の幼児は非常に活動的で、殆んど坐らずに立ち、歩くよりは走り、一時も静かにせず、つぎ、ことを知らない精力を無謀に費す。というのが普通の状態である。こうした旺盛な活動力を放任し、消極的な健康指導のみに力を注ぐことはまことに片手落ちである。

幼児の円満な身体発達を促すには、車の両輪のようにこれらの両面を考えつつ指導に当らなければ、正しい健康教育は行えないであろう。

こうした観点から、当園では従来余り行われていなかった体育的な面につき確実な基礎の上に立って、幼児の発達に即した適切な指導を行いたい考えから、生ず運動能力の調査を行ったのである。そして五才児の実態をつかむため、その前後の年令の幼児についても調査したわけである。

一、運動能力調査の方法

運動の基礎的技能つまり一般的な運動能力を調査するため、さきに児童母性研究会で行った次の六種目を取り、昭和二十七年より三年間連続して調査を行ったのである。この他にも最近教育大学の松田先生を中心として研究されつつある五つの運動の因子(平衡性・柔軟性・動力・筋力・協応性)に基いた種目による分析的な調査も行ったのであるが、今回は紙面の都合上省略する。

- (1) 二十五米疾走 二十五米の直線コースを走る時間をはかる。
- (2) 立幅跳 両脚を揃えて前方へとび、その距離をはかる。
- (3) 投てき 重さ一五〇互の布製砂入ボールを投げ、その距離をみる。

(1) 25 m 疾走 (秒)

年 度	年 令		4 歳		5 歳		6 歳	
	性別		男	女	男	女	男	女
	要項	数均差						
昭二十七年 和	人平	数均差	11	11	15	15	4	3
	標準	偏差	7.49 0.44	7.91 1.26	6.38 0.5	6.84 0.43	6.15 0.43	6.4 0.4
同二十八年	人平	数均差	11	12	15	21	5	5
	標準	偏差	7.4 0.93	8.0 0.76	6.92 0.73	6.75 0.93	6.00 5.92	6.66 0.23
同二十九年	人平	数均差	25	24	13	15	38	38
	標準	偏差	7.26 0.65	7.76 0.96	6.21 0.51	7.39 0.24	5.77 0.41	6.02 2.01
児童母性 研究会	人平	数均差	138	117	345	315	217	211
	標準	偏差	7.79 1.20	8.27 1.34	6.59 0.83	7.20 1.07	6.21 0.66	6.85 0.88

(2) 立 幅 跳 (cm)

年 度	年 令		4 歳		5 歳		6 歳	
	性別		男	女	男	女	男	女
	要項	数均差						
昭二十七年 和	人平	数均差	11	16	16	11	4	3
	標準	偏差	92.09 14.50	99.5 14.26	107.43 12.34	99.5 14.55	105.75 8.85	106.00 9.93
同二十八年	人平	数均差	12	12	16	21	5	5
	標準	偏差	90.42 12.08	79.16 11.60	72.12 29.90	93.33 13.95	112.00 2.45	100.00 4.47
同二十九年	人平	数均差	24	28	13	15	40	40
	標準	偏差	84.25 13.03	79.1 12.57	104.62 11.18	90.00 13.03	116.45 13.96	112.85 18.12
児童母性 研究会	人平	数均差	135	119	346	318	218	212
	標準	偏差	89.2 18.0	84.2 16.8	105.1 19.8	97.9 18.9	115.7 19.1	105.6 19.7

(3) 投 て き (m)

年 度	年 令		4 歳		5 歳		6 歳	
	性別		男	女	男	女	男	女
	要項	数均差						
昭二十七年 和	人平	数均差	11	12	14	14	4	3
	標準	偏差	4.78 1.18	2.99 0.78	7.85 2.57	3.78 0.74	6.87 1.94	4.40 0.43
同二十八年	人平	数均差	11	12	16	21	5	5
	標準	偏差	6.91 2.02	3.74 10.89	6.75 2.33	4.33 1.22	10.60 0.48	4.60 0.48
同二十九年	人平	数均差	26	26	15	15	40	41
	標準	偏差	5.97 1.90	3.47 0.97	9.31 2.49	3.91 1.12	10.50 3.07	5.57 1.41
児童母性 研究会	人平	数均差	132	110	334	316	212	216
	標準	偏差	4.83 1.49	3.39 0.90	7.21 2.25	4.40 1.29	9.66 2.79	5.50 1.35

(4) 荷重疾走 Ⅱ 重さ五疋の砂袋をかかえて一〇米の距離を走る時間をはかる。
 (5) 懸垂 Ⅱ 鉄棒に肘をのばして懸垂し、がまんできなくなつて手を離すまでの時間をみる。
 (6) 片跳連続跳 Ⅱ 片脚で二十五米の直線コースをとび、出発線からとべなくなった地点までの距離をはかる。二十五米の最後の

地点まで行った者は足を下さず、そのまま折返し続ける。
 二、調査の結果(次表)
 三、当園幼児の運動能力の特質
 調査の結果を先ず当園幼児のみについて考察すると、次のような点があげられる。
 (1) 二十五米・立市跳・荷重疾走については、個人差がはげしくない。
 (2) 投てき・片脚跳は個人差が多い。
 (3) 特に投てきには男女差が多く、男児が断然すぐれている。
 (4) 全般に男児の能力がまさっている。
 また当園の三年間の平均値と、児童母性研究会の平均値とをグラフによって比較すると、図の通りである。
 後掲のグラフで明らかのように、児童母性

(4) 荷重疾走(秒)

年 度	年 令		4 歳		5 歳		6 歳	
	性別		男	女	男	女	男	女
	要項							
昭二十七年 和	人平	数均差	10	11	16	15	4	3
	標準	偏差	4.47	4.01	3.66	3.40	3.6	3.8
同二十八年	人平	数均差	12	12	16	21	5	5
	標準	偏差	4.06	0.66	4.37	4.02	3.94	4.06
同二十九年	人平	数均差	23	28	14	15	40	41
	標準	偏差	4.24	4.78	3.91	4.53	3.46	3.69
児童研究会 母性会	人平	数均差	128	117	319	313	198	207
	標準	偏差	4.52	4.74	3.85	4.16	3.51	3.78
			0.81	0.91	0.60	0.68	0.48	0.49

(5) 懸 垂(秒)

年 度	年 令		4 歳		5 歳		6 歳	
	性別		男	女	男	女	男	女
	要項							
昭二十七年 和	人平	数均差	12	10	15	17	4	3
	標準	偏差	21.33	53.30	52.56	60.41	61.00	62.33
同二十八年	人平	数均差	11	12	16	18	4	5
	標準	偏差	44.00	57.75	37.13	43.34	36.5	27.94
同二十九年	人平	数均差	27	27	14	14	39	38
	標準	偏差	41.22	30.66	79.36	57.71	70.77	61.28
児童研究会 母性会	人平	数均差	139	125	326	314	194	206
	標準	偏差	60.48	67.76	80.6	73.6	119.2	120.48
			40.10	42.80	59.6	62.60	80.2	70.00

(6) 片 脚 跳 (m)

年 度	年 令		4 歳		5 歳		6 歳	
	性別		男	女	男	女	男	女
	要項							
昭二十七年 和	人平	数均差	11	10	15	15	2	3
	標準	偏差	20.60	34.70	42.13	50.86	59.00	57.66
同二十八年	人平	数均差	12	12	16	21	5	5
	標準	偏差	20.68	30.58	30.00	49.47	39.40	63.50
同二十九年	人平	数均差	27	27	14	15	40	41
	標準	偏差	24.00	26.13	43.96	42.60	66.05	64.05
児童研究会 母性会	人平	数均差	126	114	326	301	206	200
	標準	偏差	26.05	29.65	49.55	46.75	77.45	64.77
			17.20	14.15	23.80	23.25	34.50	24.10

研究会と当園とを比較すると、次のような点が考察される。

- (1) 当園は二十五米疾走においては、男女共にすぐれている。
- (2) 投てきは両方とも男女差が甚しい。当園の男児は先方より優れているが、女児は劣っている。
- (3) 懸垂において当園児は非常に劣っている。

(4) 片脚跳も全般に劣っている。

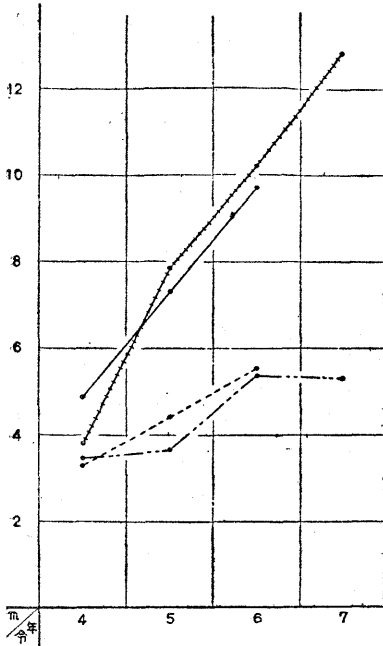
当園の幼児が二十五米疾走、つまり走りこにすぐれている原因は、都の幼児の平均とくらべ、身長がすぐれていることと、もう一つ、調査の場合、一人だけを走らせず、二人ずつにして、その競争心をかりたためたため結果()と、この二つの点が考えられる。

とにかく、この六つの種目の結果を通して

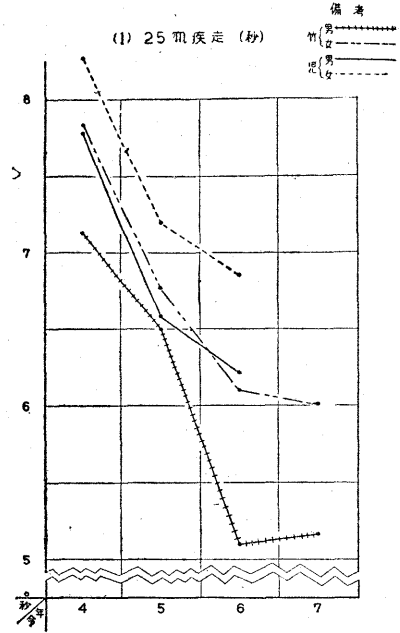
全般的に考えられることは、懸垂、片脚跳などの弱いことから、当園幼児は総合的にみて筋力(持久力)が非常に弱い。

という実態をつかみ得たわけである。筋力や持久力の面が欠けているのは、都市のこどもの通弊であるといわれているが、それが当園幼児にもはっきり現われていること

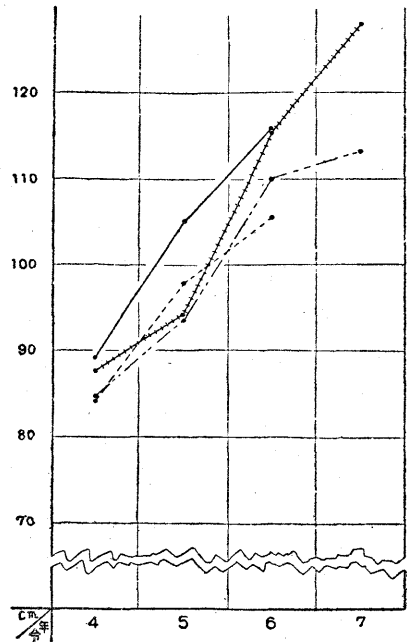
(3) 投てき



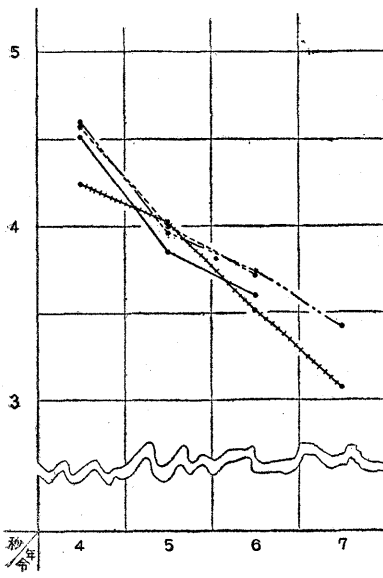
(1) 25m 疾走 (秒)



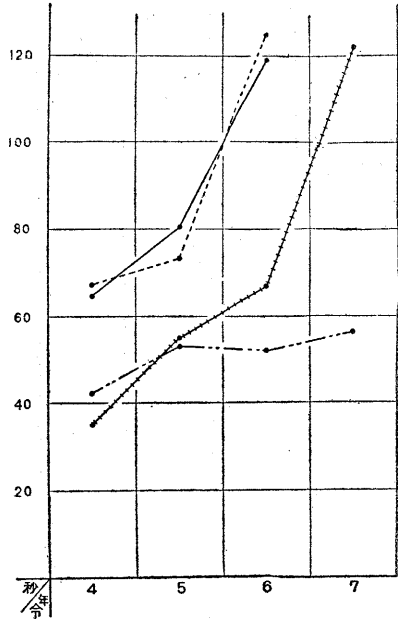
(2) 立幅跳 (cm)



(4) 荷重疾走 (秒)



(5) 懸垂



がわかったわけである。その原因については当園が運動能力調査と同時にを行った各家庭における。

四季折々の幼児の時間的生活調査及び

室内や庭の広さ

あそび場所

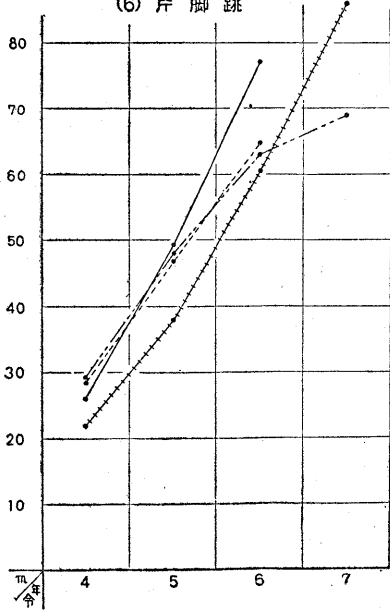
あそびの種類

遊具・玩具

などの環境調査によってさぐるることができる。

つまり、都市があるために、あそび場所が恵まれず、一方知的教育に偏し易い家庭が多いため、いきおい静かな室内、あそびに傾き、活動的なあそびが少くなる。また一面、比較

(6) 片脚跳



的恵まれた家庭が多いため、毎日の生活に依頼心が助長し易い状態であり、従って意志力に欠ける傾向である。

かれらの点が、筋力・持久力といった運動能力の中でも特に意志力に関係をもつ種目に欠陥として現われてきたのであろうと推察されるのである。

とにかく、三年間以上の種目について、幼児が楽しみつつ、全力を出して、一生懸命にするよう細心の注意をはらってそうした雰囲気醸成に工夫や苦心を重ねながら調査を行ったのである。この結果は私どもの園の実態

であって、五才児の全般的、標準的なデータとしてはいい得ないであろう。今後いろいろな地域、多くの幼児の調査が累積されて、日本の幼児の基準のつくられることを望んでやまない。しかし、私どもは、日々の幼児の活動的な生活の指導の面で、個人的に、また全体的に、或は体育的な施設についても大きな資料の与えられたことを、この上ない喜びとしている。

(本稿にその一部をのせた幼児の運動能力の発達及びその指導の詳細については、当園発行の文部省実験幼稚園研究発表要項第一・二・三年次を参照されたい。尚、三年間の研究の集録は近く文部省から発行される豫定である)